〔翻　訳〕

講義録の中に見るヘーゲル論理学

アンネッテ・ゼル
牧　野　廣　義（訳）

訳者まえがき

2011年度の阪南大学外国研究者短期招聘制度によって来日されたアンネッテ・ゼル氏（ドイツ，ボーフム大学，ヘーゲル・アルヒーフ共同研究員，教授資格取得者）が，３月25日（金）に一橋大学の佐野書院にて講演された。テーマは「講義録から見たヘーゲル論理学」（Hegels Logik in Vorlesungsnachschriften）であった。当日の司会と通訳を大河内泰樹氏（一橋大学准教授）が担当され，私が講演の翻訳を担当した。本論はその翻訳である（ただし，表題を含め，訳文を一部変更した）。

ゼル氏は，現在刊行中の『ヘーゲル大全集』の中の「論理学講義録」の編集作業を担当されている。この編集作業の意義と彼女が編集している10種類の各講義録の特徴と意義などを講演された。討論では，ヘーゲルが詳しく講義した「予備概念」の意義，弁証法と生命との関連，ヘーゲルが教科書として使った著作（要綱）と講義の内容との関連などが議論された。懇親会では，ドイツと日本のヘーゲル研究，若手ヘーゲル研究者の育成の課題，ドイツと日本の研究体制などについて交流が行われた。

講義録の中に見るヘーゲル論理学

本というものは常にすでにできあがったものではなく，降ってわくようなものでもありません。私たちが読者として哲学的，文学的，あるいは音楽的な作品をひもとく以前に，すでに長い仕事の過程が先行します。この過程の初めには作者による作品の執筆があります。作品は以前には（部分的には今日も）手書きでしたので，したがって作品はまず草稿として存在します。ある場合にはテキストがすぐに印刷できる形態で確定されて，作者の生きている時代に出版されたものもあります。しかし多くの手稿や楽譜は，今日に至るまで未だに公刊されていません。したがって現代的な編集によって初めて，文書館や図書館の中で未公刊のままになっているものが公開できるようになります。しかし芸術や学問の作品は，埋もれた文化的資源を公共的に利用できるようにするためには，いずれにしても編集されなければならないでしょう。偉大な精神的な業績は，ほとんど常に過去の作品についての正確な知識によって支えられています。こうして編集作業は，過去をふり返って現在をよりよく理解し，新しいものを生み出す可能性を与えるものです。編集作業はまた文化的業績の一種の保管場所と見なすことができます。編集作業なしには，幾つかの手稿は忘れ去られ，また素材的にも腐朽してしまい，そのために後代にはもはや利用できないものになってしまうことでしょう。それゆえ哲学的著作や文学的著作の編集は，その学問的価値におい

無断転載禁止

ても，またその文化的および政治的意義においても，学問的生活や精神的生活の本質的な構成部分をなします。その影響は専門分野での受容を超え，各国の国境を越えて広がります。多くの人に読まれている著者たちの編集のことを考えてみましょう。編集作業は歴史的な状況のもとで成り立ちますので，それは同時に一定の学問的および政治的見解の表現でもあります。歴史的状況は常にまた編集作業に影響し，同時に編集作業が時代の学問的および文化的思考に影響を与えます。際立った事例をあげると，マルクス・エンゲルス大全集（MEGA）は，以前はソ連共産党中央委員会のもとのマルクス・レーニン主義のための党研究所によって決定されましたが，1989年の転換の後に再編成されました。まず1990年に国際マルクス・エンゲルス財団（IMES）の設立によって研究所の再編が行われました。その目的は「純粋に学問的な基礎にもとづいて，政治的に独立に」マルクス・エンゲルス大全集の編集作業を継続することです。そしてそれ以来，当財団が MEGA の諸巻の編集機関として機能しています。1992年には編集方針の改訂のための国際編集者会議が開催され，そこでは編集方針の核心としてとりわけ，さらに厳密なテキストの正確さ，使用された研究文献の正確な紹介，および注釈における厳密な世界観的中立性が義務づけられました。最後にまた，党に近いディーツ出版社からアカデミー出版社へと出版社の変更が行われました。この事例をここであげたのは，編集作業の政治的次元を明らかにするためです。

忘れてならないことは，編集すべきテキストを選択することはまたすでに，どの著者が編集に値し，どの著者は値しないかという評価を行うことです。それゆえ編集作業は常に解釈上および政治上の決定に依存します。そのさい，編集の影響力を軽視してはなりません。編集は学問的な前進に持続的に影響を与えます。そして著者ないし哲学者についてそれまでに成立していた全体像に疑問を提示したり，それを正すことさえありうるのです。歴史的・批判的編集は，その中に示された研究成果によって，すでに知られたテキストを異なった仕方で評価したり，音楽に関しては異なった仕方で演奏することに導きます。学問の領域で著者が新しく発見されたり，また演奏会場やオペラ劇場で作曲家が新しく発見されることも，まれではありません。

＊

編集作業一般についての以上の前置きは，編集作業にどれほど大きな意義があるかのを示す上で，ここではこれで十分でしょう。私たちの前にある哲学的著作は，すでにできあがったものとして与えられる客観的な素材ではありません。著者と読者との間には編集者が存在します。編集者は彼のやり方で，思想家によって書かれた言葉を読める形にするのです。編集者の意義は，哲学の学生にとってもその学問の出身の幾人かの同僚にとっても，しばしば意識されません。人びとは本を，それが提供されるがままに読み，少なくとも確かな事実として受け取ります。その背後に政治的な決定や編集上の文献学的な決定が隠されていることは，しばしば背景に置かれます。

編集者の仕事は，しかしまずはいつも同じように始まります。編集者は資料を目の当たりに見ます。この資料はたいてい草稿であったり，今日ではまた電子データであったりしますが，編集者はそれを手がかりにして，テキストの歴史的形態を再現するような確実なテキストを作成しようとします。編集者はテキストを著者が表現しようとした仕方で再現することを望みます。資料に対する忠実さは大変重要なことであり，それはいわゆる歴史的・批判的編集の中に示されます。ヘーゲル『大全集』はそのような編集であると理解されています。歴史的・批判的編集という専門用語をまず明確にしておく必要があります。ボード・プラハタによる編集学の専門書は，歴史的・批判的編集について次のように述べています。「テキストないし著作がテキスト批判および編集技術の原則に従って作成された版であり，確実で，誤りを除去したテ

無断転載禁止

キストを含んでいるものであり（これが批判的である），テキストの生成にいたるすべての異文を記録したものである。テキストの記録は，テキストの歴史およびその成立史，著者の生存中の影響史の叙述によって，またテキストを解明する注解によって補足される（これが歴史的である）。それゆえヘーゲルの講義録は，歴史的な記録として無批判的で実証主義的な仕方で公刊されるのではなく，可能な限り著者の思想を公刊することが必要です。それに代わるやり方は，筆記録をもっぱら書き換えるだけで，それゆえ書き写して，公共的に利用できるようにすることでしょう。このような仕方では編集者はもっぱら解読者にすぎず，ヘーゲルの思想をテキストの資料のかたまりから取り出すことは読者に委ねられることでしょう。しかし編集者の具体的な仕事においては，テキストの書き換えは単に第一段階にすぎません。つまり，編集者は手稿を解読して，コンピュータを使って印刷された形にします。ある学生はかつて私に，「あなたはテキストを単に書き写しているだけです」と言いました。この「単に」は幾つかの点で認めることはできません。解読の困難な手稿が実際に存在し，テキストを書き換えるためには多くの哲学的な専門知識と良い目と多くの忍耐が必要なのです。テキストの書き換えと並んで，テキスト批判的な補足資料の作成が重要な課題となります。編集作業は，テキスト批判的で注解的な補助資料によって，公刊されるテキストを解明することです。楽譜や手稿テキストは，構成されたテキストを学問的に検証するために，テキスト批判的な補助資料を必要とします。テキスト批判的な補助資料は，たいていページの下に付けられて，読者が実際のテキストを知り，場合によってはテキストの異文を知る手助けとなります。それゆえ補助資料は，テキストの信頼性の程度を高めることになります。例えば，テキストの中にある文法的な誤りは訂正されますが，この時にはこの訂正はテキスト批判的な補助資料の中で付言されます。編集者のいかなる介入も記録されます。

編集作業は同様に注解を必要とします。というのは読者はテキストが成立したすべての連関を見通してはいないからです。この注解は，テキストの成立史と影響史によって補完されます。注釈はたいてい巻末に置かれ，それなしにはテキストを理解できないような，著者の他の著作への言及や当時の議論を解説します。編集報告は，著作の形態と伝承史についての説明を与え，そのことによって初めて出版されるテキストを学問的に利用可能なものとします。読者はたいてい草稿を見ることはできませんので，各々の草稿ないし筆記録はその外形が記述されます。そのような報告は編集の付録の中に見られます。こうして，それらのことに私のような編集者は毎日携わっています。電子的なデータの加工は編集者の仕事日の中でますます大きな役割をもっています。一方では，プログラムが開発されて，その助けによって編集作業ができます。他方では，編集作業はデジタル波で提示されます。また編集作業はインターネットによって一般的な利用のために提供されます。

編集者がこのような仕事をして，出版されるべきテキストを加工した後は，テキストをある形態にすることが必要です。ヘーゲルの講義録の場合は本にすることが問題です。出版社との協同作業が，私たちの場合はハンブルクのフェリックス・マイナー社との協同作業が，始まります。そのさいに本についての私たちの判断を決定するのは美的な基準でもあります。本は読者のために実用的で美的な仕方で提供されるべきです。それゆえ本の形態と字体が議論されます。同様に本の大きさと色は編集計画の最初に決定されなければならないでしょう。以上では，編集者の仕事を一般的に一瞥しました。それは当然，出版されるべき著者によってそれぞれ異なります。ラテン語やギリシア語のテキストには，言語の知識と並んでまた，ヘーゲルの著作の編集者とはまったく異なる能力が要求されます。私自身はヘーゲル・アルヒーフで仕事をしていますので，ヘーゲル論理学の講義録についての私の仕事を紹介したいと思います。

無断転載禁止

＊

以下では，ヘーゲル論理学の講義録の編集作業を問題にしたいと思います。論理学はヘーゲルの体系の中で根本的な学問であり，そこでは思考および存在の様式が展開されます。言い換えれば，それが自己自身を展開します。ヘーゲルは彼のすべての活動時期において論理学と徹底的に取り組みました。『大論理学』をヘーゲルは体系的な著作として提示しました。同様に『哲学的諸学のエンチュクロペディ要綱』はその３つの版で論理学を第一部として含んでいます。そしてヘーゲルは1819年から1831年まで毎夏学期に論理学の講義を行いました。ヘーゲルが彼のすべての教育活動の中で最も頻繁に講義したのは，論理学です。さらにヘーゲルの体系の中の他の学科は，ただ講義としてのみ成立しました。それらは美学，宗教哲学，および世界史の哲学です。本日の講演の中心テーマである論理学講義は，『エンチュクロペディ』の論理学を踏まえて行われました。そのさい，学生達はすでに出版された『エンチュクロペディ』のパラグラフに基づいて講義個所を知ることができます。『エンチュクロペディ』は，それゆえ概説は，広範な詳論ではなく要約的なパラグラフからなる「手引き」として作成されました。『エンチュクロペディ』の第三版の「序文」では次のように言っています。「しかし概説という教科書の目的のために，文体は簡潔で，形式的で抽象的なものにならざるをえなかった。それは，口頭での講義によってはじめて必要な説明を与えられるという特徴をもっている」[1)]。それゆえ講義録によって初めて『エンチュクロペディ』の理解が可能になります。しかしヘーゲルは講義の中で『エンチュクロペディ』の印刷されたテキストを単純にパラフレーズしたり繰り返したりしようとはしませんでした。むしろ各講義は，したがって筆記録は，それぞれの重点と固有の特徴をもっています。この講義のためのヘーゲル自身の手になるテキストはほとんど存在しませんので，学生たちの筆記録が決定的な役割を果たします。それゆえヘーゲルの講義を公共的に利用できるようにするためには，筆記録はしばしば唯一の資料となります。これらの講義は，全体として，論理学の二つの公刊された体系的な著作に対する重要な補足になります。ヘーゲルは講義の中でまったく新しい論理学を構想したわけではありません。しかし彼は講義の中で論理学を大変生き生きと直観的に，そして部分的には新しい観点から論じました。

筆記録は，ヘーゲルの講義に出席した学生たちによってその場で筆記され，さらに大部分は講義の後にさらにもう一度手を入れて清書されました。論理学には，異なった年度の合計10の筆記録が存在します。編集者はこのような素材を基にしてヘーゲルの講義を複製します。この複製は，ヘーゲルの言葉を背景に踏まえた一種の解釈です。論理学講義録を正確に編集するために，復元すべき講義テキストを『エンチュクロペディ』および『大論理学』と関係づけます。ヘーゲルはたいてい，まず『エンチュクロペディ』の各々のパラグラフを読んでから，彼の説明をつけ加えます。筆記録にはしばしばパラグラフの数字が学生たちによって書き加えられていますので，その場合には講義テキストは『エンチュクロペディ』と一義的に関係づけることができます。このような状況にあれば，編集者は彼の編集において正確な，すなわち信頼できるテキストを仕上げることになります。

講義録を手がかりにして，重要な内容的な考察ができます。ヘーゲルが論理学の「予備概念」として呼んで，本来の論理学の前においている個所は，すべての筆記録において大きな部分を占めます。「予備概念」をこのように詳しく論じることは，講義の組み立てと構想におけるヘーゲルの無能力のせいにすることはできません。むしろこの個所の詳しい叙述の理由はヘーゲルの思考そのものに基づくものです。それゆえ「予備概念」の意味と目的に関する問いが立てられなければなりません。論理学は，概念が自己自身に基づいて展開して，直接的で純粋な始元から絶対的な理念へと導くべきものです

無断転載禁止

から，体系的には本来，導入ないし「予備概念」を必要としないものです。にもかかわらず，なぜヘーゲルはテキストのこの部分を書き，それを講義の中できわめて詳しく論じたのでしょうか。それは次の点にあります。つまり，ヘーゲルは，本来の論理学がその地点から始まるということが意識にとって認められる所まで，意識を導くということです。こうして，「客観性に対する思想の三つの態度」が成立しました。ここでヘーゲルは，哲学の三つの形態（旧形而上学，批判哲学と経験論，および直接知）を手がかりにして，主観と客観とがどのような関係において考察されるかを示します。そのさいヘーゲル自身はこのような準備において，論理学の前ないし外にとどまっていることに困難さを見いだしています。福音派の神学者カール・ダウプは，ヘーゲルからの手紙で『エンチュクロペディ』第二版の印刷のための最終校正を受け取ったのですが，その手紙の中でヘーゲルは，論理学への導入の拡大があまりにも大きな場所を占めてしまったことを伝えています。ヘーゲルは，簡略化できなかった理由として，ベルリンでの大学の日常業務をあげています。「客観性に対する思想の三つの態度」についてヘーゲルは次のように言います。「ここで私が区別した三つの態度についての論究は時代の関心と合致します。この導入は哲学の前にだけあって哲学の内部には入りませんので，それだけいっそう私にとって困難になりました」[2)]。この哲学の前にあって哲学の内部ではないという問題，およびそれと結びついた，ヘーゲルの全体系にとっての帰結については，今日もなおヘーゲル研究者が取り組んでいる問題です。

＊

さて，論理学の講義録を個々に紹介しましょう。イェーナ時代のものからは，イグナツ・パウル・ヴィタル・トロクスラーによる1801/02年の冬学期の講義が存在します。この筆記録はヘーゲルのイェーナ時代から保存されている唯一の論理学講義録です。この時点ではヘーゲルはまだ彼の弁証法的な論理学の構想を仕上げていませんでした。ここでは，論理学の前段階に出会います。それは，ヘーゲルが自分自身の立場を獲得するために，カントとフィヒテのカテゴリーに基づいて自分の位置をとらえようとしていることを示しています。この講義はすでに出版されています。そして『大全集』の第23巻の１のために新しい編集原理に従って改訂されました。

1817年頃のもので『エンチュクロペディ』の第一版に関係する筆記録が５つあります。1817年のフランツ・アントン・ゴートのハイデルベルク時代の筆記録の中には，包括的な「予備概念」と弁証法の「機能様式」についての詳しい叙述を見いだすことができます。この筆記録は全体として1817年の『エンチュクロペディ』の原本とかなりの程度において異なります。しかしすでに「客観性に対する思想の三つ態度」へと仕上っていることを示唆するものです。もっとも「客観性に対する思想の三つの態度」は1827年の『エンチュクロペディ』の中で初めてそう名づけられ，完成されたのです。ここではまず形而上学の歴史的時期が登場します。次に経験論と批判哲学が取り上げられます。また直接知および特にヤコービが言及されます。とりわけ強調すべきことは，この筆記録における「予備概念」は全体として，ヘーゲルの自然哲学的思考，および弁証法と生命との一定の一致を明示していることです。生きた自然の規定は講義を貫いており，弁証法と生命との関係は次の命題において頂点に達します。「弁証法的なものは生命一般の脈動です」[3)]。「予備概念」と論理学の三部門〔有論・本質論・概念論〕と並んで，弁証法の立ち入った規定がこの講義録の特徴をなしています（〔　〕内は訳者の補足。以下同様）。次の引用は，弁証法と自然的生命との結びつきを示します。「弁証法はあらゆる意識や思考の中と同様に，またあらゆる世界の中に登場します。例えば，緑の葉は色あせ，すべての動物とすべての植物の種属は変化し滅びます。死の萌芽と事物の変化の萌芽，これがその弁証法的契機です」[4)]。

無断転載禁止

1823年のハインリヒ・グスタフ・ホトーの筆記録が存在しますが，それはしかし途中で中断して，「予備概念」のみを含んでいます。この筆記録はヘーゲルの発展史の中で特別な仕方で興味深いものです。というのは，それはレオポルト・フォン・ヘニングがいわゆる友人の会版の編集において公開したものなので，その筆記録の抜粋がこの版のいわゆる「補遺」として読むことができるものであり，1823年の講義の筆記録とは確認されないまま，すでにヘーゲル受容の中に入り込んでいるものだからです。ホトー筆記録のパラグラフ数の付け方は同様に1817年の『エンチュクロペディ』に従ってものであり，それに対応して§12から始まります。それは1827年の『エンチュクロペディ』において初めて仕上げられた思想を含んでいます。例えば，ここでヘーゲルはすでに客観的思考ないし客観的思想について語り，そのことでもって，思想はもっぱら主観的なものであるという見解に反対しています。それに続いて，1817年の『エンチュクロペディ』と同様に，形而上学についての詳しい考察と規定が述べられます。それは存在論，合理的心理学および合理的宇宙論，さらに自然神学に区分されます。論理学の課題は，すなわち思考の学問であるということですが，それをかつては形而上学が引き受けました。「なぜなら，形而上学は思想の対象を思想諸規定において把握しようとしたからです。それゆえ形而上学は思考することであり，自分を自分の中で明確に把握することでした。しかし次に形而上学は，思考諸規定が適用される，一定の対象をもちました。それゆえ，形而上学はその内容として，先の思考諸規定が関わった一定の対象をもちます。しかしこれらの対象そのものはまったく普遍的な対象であり，同様に思想の土台に属するものです。すなわち，それは精神，世界，神です」[5]。それゆえ形而上学は，思考諸規定と，したがってまた思想の推理を問題にしましたので，ヘーゲルは当時の形而上学を論理学との直接的な関係でとらえました。それはまたヘーゲル自身の論理学に関係することを意味します。「それゆえわれわれの論理学は古い形而上学と関係する」[6]。ホトーはこの筆記録によって大変賢い学生であり筆記者であることを示しています。ヘーゲルの思想は筆記者によって貫かれています。そのことはまた筆記録の欄外に書かれた付随記載が立証しています。それは筆記者が体系的なまとめを書いたものです。この付随記載ないし欄外覚え書きは，確かにヘーゲル自身の言葉ではありませんが，ヘーゲル論理学を信頼できる仕方で記録する出来映えのよい筆記録であることを表現するものです。

ホトーによって筆記された講義の一年後，ヘーゲルは1824年の夏学期に再び論理学の講義を行いました。それはジュレ・コレフォンの筆記録によって伝えられています。ここでもまた，思考の対象，方法およびあり方についての反省が講義の最初に行われます。『エンチュクロペディ』の第二版において初めて仕上げられた「客観的思考」についての思想はここでも同様に論じられます。1827年の『エンチュクロペディ』の§24で，ヘーゲルは客観的思想について語ります。それは真理であり，哲学の絶対的対象です。それゆえ悟性と理性は単に主観的なものだけではなく，また「世界の中に」あります。「しかし客観的思想という表現は不都合なものです。なぜなら思想という表現は普通には単に精神や意識に属するものとして用いられ，同様に客観的なものという表現はまず非精神的なものだけに用いられるからです」[7]。主観的思考と客観的思考の問題を，ヘーゲルはコレフォンの筆記録の中で詳しく分かりやすく反省しています。「人びとは思考を学びます（また思考を主観的な意味で受け取って，その中で考え，その中で思想の訓練をします）。論理学は思想だけに，しかも純粋な思想だけに関わります。それゆえ論理学は思考の訓練を行い，そのことで主観的な熟達を提供します。思考はもはや主観的なものではなく，客観的なものであり，客観に関係するものとしてとらえられるならば，その内容は主観的なもの以上のもので

無断転載禁止

す。こうして思考は熟考となり，何ものかについての思考となります。熟考とは，感性的な現象にはとどまらないこと，直接的な表象を超え出ていること，本質的なものが探求されることです」[8)]。そしてここでは，『エンチュクロペディ』からの上記の引用で述べられた不都合が，つまり客観的思考という表現が非精神的なものと言う意味で使用されない時の不都合が，始まります。ヘーゲルの意味での客観的思考に到達するためには，純粋に主観的な思考を，したがって一面的な思考を克服することが必要です。ヘーゲルは，主観的な思考諸規定はまた存在の諸規定であることを示そうとします。「それゆえ客観的思考は規定された存在を度外視しないならば，普遍的なものの活動であり，活動するものとしての普遍的なものです。――普遍的なものは，さまざまなものから切り離されたものとして，普通に表象されるものではありません。普遍的なものは活動的なもの，作用するもの，規定するものとしてあります。論理学はこのような意味での思考についての学問です」[9)]。このように，コレフォンの筆記録においてヘーゲルは特にこのような客観的なものの思想を展開しましたが，それは1827年に初めて体系的に叙述されるのです。もちろん，120ページにおよぶジュレ・コレフォンの筆記録は，客観的思考についてのこのような考察に掛かり切りで解説するものではありません。ここではこの講義の単に一つの観点を述べることができただけです。この講義録は全体として有論，本質論および概念論を包括しています。

1825年のヘルマン・フォン・ケーラーの筆記録は，同様に1827年の『エンチュクロペディ』を背景に踏まえて成立し，そのパラグラフ数の付け方に従っています。しかしこの講義録は断片であり，「予備概念」の真ん中から始まっています。それに先行するパラグラフは欠落しています。編集者はまた常に筆記録の形態を吟味しなければなりませんから，ケーラーのテキストについて言えば，これは講義中のノートであると言うことができます。このノートは書き換えるのが困難なものです。というのは，多くの短縮語が使われ，字体はこの学生が大変速く書いたことを推測させるものだからです。しかしこの筆記録は内容的には興味深いものです。というのは，ここでは幾らかの欠落はあるものの，論理学の三部門がすべて論じられているからです。

おそらくは1826年に由来する筆者不明の筆記録において，ヘーゲルは思考を規定するにあたって，ゴートの筆記録におけるのと同様に，人間は常に考えるということから出発している点で，興味深いものです。たとえ人間は感じるものであり，感性的に振る舞うとしても，考えるものです。まず表象から出発して，ようやく最後に思考とは何かを知るのは，人間の本性です。この個所では，『エンチュクロペディ』における表象概念は使われていません。ヘーゲルによって書かれた概説書からの変更は思考の三つの様式への区分にもあります。筆者不明の筆記録では，「1）思考が包みこまれた様式，あるいは感性的な知覚，／2）反省の様式，／3）論理的思考，論理学の哲学への関係」[10)] とあります。ここであげられた思考の三つの様式は，1817年の『エンチュクロペディ』と1827年の版の中で取り上げられたような，思考の三つの叙述〔悟性，否定的理性，肯定的理性〕に単に間接的に関係づけられるにすぎません。ヘーゲルはここで事柄においては確かに概説書と異なることはなく，この時期においても思考の明確な規定と，主観と客観との関係の規定に取り組んでいることを示しています。またこの筆記録には，主観と客観との関係を哲学史的に規定し批判する，客観性に対する思想の三つの態度が準備されています。とりわけ旧形而上学と経験論およびカント哲学についての詳論はそのことを示しています。筆者不明の筆記録はもっぱら「予備概念」の叙述ですが，しかし途中で中断しています。「筆者不明」の背後にどのような人物が隠れているのかを見いだすことはできません。またそれの明確な年代を確定できているかどうかも不確かです。その筆記録はアーヘン

無断転載禁止

（ドイツ）の州立図書館に保管されています。それは同一の筆者による1826年の美学講義録とともに綴じられており，したがってそれらが同じ学期の二つの講義であると推測することは自然なことです。

1827年の『エンチュクロペディ』のパラグラフ数の付け方に従った，２つの筆記録が存在します。ヘーゲルは1827年以来この第二版を基にして講義を行いました。そのうちで『エンチュクロペディ』の第二版に対応して最初に作成された筆記録は，カロル・リベルトによる1828年のものです。ポーランド人の学生であるカロル・リベルトの筆記録は，多くの言語的な弱点を示しています。ここで編集者は意味のある講義録を作成するために，しばしば介入しなければなりません。すべての介入は，上記のように，テキストの補足資料の中で明らかにされます。したがって読者には，手稿においてはもともとどのような表現や言葉が使われていたかが分かります。またリベルトの筆記録は詳しい「予備概念」を含んでいます。それは草稿全体のほとんど半分を占めます。ここでは同様にまず，思考の学問である論理学一般が問題にされます。そしてヘーゲルはどのように論理学の方法を説明し，さらに本来の始元にまで導くかが明らかになります。このさいまず，真理が問題にされます。真理は第一に対象に関わり，第二に精神の活動に関わります。私たちの概念は対象と一致しなければなりません。真理を獲得することが私たちの課題です。それは，精神の活動によって，あるいは感性によって成立します。しかしまた感覚によっては経験できない対象があります。「すなわち宗教と人倫です。神とは何か，私の使命とは何かがまず第一に問題になります」[11]。これらの思想は，印刷された『エンチュクロペディ』のテキストに対応します。リベルトの筆記録では，次のことへの反省に連結します。すなわち，神は感覚では認識できないものだから，神はいかにして把握できるかということです。そのようにして神は主観的なものと結びつかなければなりません。それゆえヘーゲルの思想は論理学の対象と方法に転換します。なぜならヘーゲルの目標は「認識の本性を探求すること」[12] だからです。この課題については，次の困難性が明らかになります。すなわち，人はいかにしてこのような認識を獲得しうるのか，そしてとりわけ，そもそも人はいかにして，また何から認識を始めるべきか，ということです。「認識とは何かということを私たちは確かに知らなければならないでしょう。論理学の全体において，その結論は，認識とは自分を認識することであるということです。認識は，そこから始めることができるものであるよりも，むしろ結論をなすものです」[13]。

ベルギー人のイポリト・ロランの1829年の筆記録は論理学の全体を含み，160ページの草稿からなります。この筆記録の特徴はラテン文字で書かれていることです。すべての他の筆記録はいわゆるドイツ文字で書かれていますが，それは今日のドイツではもはや使われないものです。その他に，ロランは自分自身の短縮システムを使っています。それがまず編集者によって解読されなければなりません。ロランのドイツ語の知識は，確かに理解できるテキストにしてはいますが，しかし多くの正書法上の誤りが筆記録を通してあります。しかしここでは論理学の全範囲が叙述されていますので，この筆記録もまたヘーゲル論理学の重要な証言です。

1831年の筆記録は『エンチュクロペディ』の第三版に準拠したものです。この資料は，ヘーゲルが死亡する前の最後の講義を，当時ほぼ18歳であった息子のカール・ヘーゲルが筆記したものですが，このことだけがこの資料をヘーゲル論理学の重要な証言としているのではありません。同年のもので，ジギスムント・シュテルンの筆記録が同様に保存されていますが，しかしそれはカール・ヘーゲルの筆記録の質をはるかに下まわります。またヘーゲルの息子の筆記録の正確さと詳しさは，彼の論理学の勉強を印象深い仕方で示しています。この重要な講義録の牧野教授〔ら〕による日本語訳が存在します。「予備概念」が筆記録全体の半分近くを占

無断転載禁止

めます。目立つことは，客観性に対する思想の三つの態度が論じられる前に，導入部分（§19から§25）がヘーゲルによって詳しく叙述されていることです。ここでヘーゲルは論理学の歴史的起源を語ります。ヘーゲルは，人間は，それゆえ主観は，最初は貧弱なものでありながら，衝動によって，外面的対象をわがものとする努力をいかにするかを，詳しく生き生きと描写します。この経過は，最初は本能的なのもであって，それについての自覚はまだありません。アリストテレスはすでに対象から出発する論理学を作り上げました。彼は事物を観察しました。しかしそのさい彼は思考する概念へと移ることはありませんでした。アリストテレスの論理学は一面的なものにとどまっています。というのは，それは矛盾を回避しようとするからです。ヘーゲルはまた推理や同一律を批判します。アリストテレスに関するこのように詳しい付論は他の筆記録に見いだすことはできません。アリストテレスの論理学は形式のみを考察しましたが，しかし論理学の真理は内容との関連によってのみ規定されます。形式は内容を規定します。もしも形式が内容において真理でないことが示されるならば，それは一面的な形式です。さらに思考のあり方についての詳論が続きます。この序論は，客観性に対する思想の三つの態度の概観を詳しく仕上げています。論理学の三部門も同様に，エンチュクロペディの論理学の包括的な像を示しています。

＊

この講演では，編集者の「仕事場」を一瞥していただこうとしました。そこでは編集者は論理学の講義録に，編集作業として，文献学的に，体系的に取り組まなければなりません。それは，講義録のテキストを職人的・文献学的に，また常に哲学的に，出版できるものにするためです。そしてこうして論理学の講義録は，アカデミー版『大全集』の第23巻の１および２として公共に利用できるようになるのです。講義録が『エンチュクロペディ』の出版された版に比べてもっている長所は，講義の生き生きとした姿と詳細さであることは確かです。筆記録に対してどのような視点が向けられるかに応じて，出版された著作に対する多くの革新が筆記録の中に発見されることでしょう。それは論理学講義録の将来の読者自身によって発見できることです。講義録を手がかりとして，ヘーゲルの体系における重要な部分の発展史を追跡することができます。最後に，論理学講義録をもとにして，ヘーゲルの体系の他の学科との関係も明らかになるでしょう。このような全体的視点と，ある年次の諸講義の並行的な考察によって，ヘーゲルの思考の傾向や発展段階を区別して論じることができます。ある年次には例えばある特殊なテーマ化が際立つとすると，この特殊性が他の学科でも現れているかどうかが検討できます。しかしこのような課題は，すべての筆記録が読めるようになって，つまり出版された形で存在して初めて解決できます。それゆえヘーゲルの講義録は彼の思考の重要な部分を成します。ヘーゲルがベルリン時代に尽力したのは，まさに講義です。このように，公共的に利用可能にし，他の言語への翻訳も可能にするための重要な部分が，ボーフムのヘーゲル・アルヒーフの編集者たちが担っている編集の任務なのです。

ご静聴，ありがとうございました。

注

1）G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)*, unter Mitarbeit von Udo Rameil hrsg. von Wolfgang Bonsiepen und Hans-Christian Lucas, Gesammelte Werke Band 20, Hamburg 1992, GW 20, 27.

2）Brief an Daub vom 15. 8. 1826, in: *Briefe von und an Hegel*, hrsg. von Johannes Hoffmeister, Band III, 3. durchgesehene Aufl. Hamburg 1969,126. Vgl. auch 149f.

3）G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über Logik und Metaphysik. Heidelberg 1817. Mitgeschrieben von F. A.* Good, 13.

4）ibid.12.

無断転載禁止

5）*Vorlesung zu Logik und Metaphysik. Sommersemester 1823. Nachschrift Heinrich Gustav Hotho*, Manuskriptseite 14v.
6）ibid.
7）G. W. F. Hegel, GW 19, 49.
8）*Vorlesung zur Logik. Sommersemester 1824. Nachschrift Jules Correvon*, Manuskriptseite 2 f.
9）ibid.4.
10）*Vorlesung über Logik und Metaphysik. Sommersemester 1826. Nachschrift Anonymus*, Manuskriptseite 224.
11）*Vorlesung zur Logik. Sommersemester 1828. Nachschrift Karol Libelt*, Manuskriptseite 6.
12）ibid.12.
13）ibid.10.

（2012年 7 月13日掲載決定）

無断転載禁止